

【豊太郎が手記を書いた理由】

私は『舞姫』を読んで疑問に思ったことがある。豊太郎はどうしてこんなことを書く必要があったのか、ということである。回想を読んで私は豊太郎のしたことは最低だ、と思った。だから当然豊太郎はエリスへの行動に自責の念を持ち、その反省としてこのように過去を振り返り、自分と向き合うために手記を書いた、つまりこの手記を通して自分を非難しエリスへの謝罪の気持ちを表すのだと思った。私ならそのために手記を書く。しかし、この手記は“彼(相沢)を憎む今日までも残れりけり”で締めくくられており、自分の反省・非難というよりも相沢のせいだといった感じであった。私はここに疑問を感じたのだ。結局豊太郎はどうして、何のために、手記を書いたのか。だから私はこの理由を探ろうと思った。

そして私が結果的に行きついたこの理由は「エリスへの複雑な思いを、自らを振り返ることによって整理するため」ということである。

私は主に次の二つのことからこの理由に行きついた。

まず豊太郎が手記に至るまでである。豊太郎は日本に帰ろうとしているものの“消えない悔恨”と本人がいうようにエリスに対し、深い後悔を抱いている。そしてこれによって豊太郎は何も手つかず、身もだえするような苦しみにつきまとわれている。豊太郎は“どうすればこの思いを消し鎮められるのか”と悩むように、この思いをすっきりさせたいと思っていたのだ。そして“この恨みだけはとんでもなく深いものだから、詩や歌にして気持ちが晴れるのと同じようにはいかないかもしれないけれども”という気持ちを述べた次に“あらましを綴ってみよう”と回想を始めたように、豊太郎は手記によって確かに苦しみから逃れ、気持ちが晴れることを少なからず期待していたのである。

またこの手記の書き始めと書き終わりで豊太郎に少し違いがあることである。この手記の始めには「自分への非難・悔恨」が語られていたが、終わりには「彼(相沢)を憎む心」が語られているのである。これは、豊太郎は初めエリスとのことで自分の行動に悔恨の思いを持っていたが、手記を進めるにつれ悔恨の苦しみに折り合いをつけようと自然に自分を肯定し、最終的に相沢を憎んだのではないだろうか。“この恩人(相沢)は彼(エリス)を精神的に殺ししなり”とあるように豊太郎はエリスのことを後半で相沢の責任にしている。豊太郎はこの手記を書くことで確かに自分なりに気持ちに折り合いをつけたのである。

だから豊太郎はエリスへの複雑な思いを自ら振り返ることによって悔恨をはらし、気持ちを整理するために手記を書いたのだ。

しかし豊太郎はこの折り合いのつけ様に果たして満足してすっきりしたのだろうか、決してそんなことはないはずだ。豊太郎の“消えない悔恨”がこれで解消されるくらいなら手記に至らなかっただろう。しかし私はここに豊太郎らしさを感じた。つまりドイツで相沢に、エリスに、大臣にいつもその場しのぎの対応をしてきた豊太郎にとって、この手記

も同様、苦しみから逃れるための、その場しのぎのものにすぎなかったのではないか、と思うのだ。豊太郎は手記においても同じことを繰り返していて、人として成長していないように思える。自分自身が揺らいでいるから人のせいにしてしまうのではないか、しっかり自分と向き合うことで少なくとも相沢を憎む考えはなくなるのではないか。まだ豊太郎は自分と向き合っていないのだ。だから豊太郎はもっと自分を持ち、自分としっかり向き合うことが必要なのである。それが豊太郎をすっきりさせるのではないだろうか、と思うのである。